

愛媛トヨタ

Donation Ceremony REPORT 2008



<Contents/目次>

- Donation Ceremony Report / タイ北部への支援活動について
 - タイの現状
 - ランパーン支援物資贈呈式に至るまで
 - 支援物資贈呈式
- Publicity Work / 社会貢献活動広報について
 - News Release
 - その他広報内容



■ まえがき ■

～タイ山岳民族の現状～

私たち愛媛トヨタでは今回2回目のタイ山岳民族へ物資支援活動を行いました。今回は第1回目をはるかに越えるたくさんの物資を、多くのお客さまよりお寄せ頂きました。そして前回よりさらにタイ山岳地帯の奥地へ物資を届けてまいりました。

現在、タイ北部に広がる標高500メートル～1500メートルの山岳地帯には、アカ族、ラフ族、リス族、モン族、ヤオ族、カレン族など十数部族、約75万人の少数民族が生活しています。

多くは中国南部やミャンマー、ラオスからここ1～2世紀の間に移住してきた人々で、どの民族も独自の言語と高度な手芸技術による民族衣装をもち、焼畑農業にとまなう数年～十数年ごとの集落移動を繰り返しながら、伝統的な世界観と文化を保持してきました。今、その環境が脅かされています。

タイ政府による森林保護政策により、森林の伐採、焼畑が禁止され、定住を余儀なくされた彼らは、生活の基盤を根こそぎ失いつつあります。今では主食の米でさえ自給できなくなっている村も多く、人々は貧困にあえいでいます。

一方でタイ経済の急速な発展と近代化の流れの中で、貨幣経済や物質文明への誘惑から、村の若い人々は現金収入を求めて労働者としてバンコクやチェンマイといった都会に流れて行きますが、タイ語の教育を受けていないことから不当な差別や低賃金で苛酷な労働に甘んじねばなりません。

そのような状況の下、近年ではタイ政府も、タイ国内に定住をはたした山岳民族の人々をタイ国民として認め、受け入れていく方針をとっており、山奥の村にも小学校を作り、タイ語による教育を実施しています。しかし予算、人材、交通のアクセスの事情などにより、平地部の子供たちの教育環境と比較するとまだまだ不十分で、小学校すらない村、また校舎はあっても教員が不足している村が多数あります。

山の子供たちにとっても、今後いやおうなしにタイ社会と関わりながら生活していく以上、最低限の学歴と知識は必要になってきます。しかし一家の所得が10000バーツ（日本円にして30000円程度）にも満たない家庭がほとんどという山岳民族の人たちにとって、町の学校に子供を寄宿させて勉強させるのはとうてい不可能で、中学三年生まで義務教育とわられているにもかかわらず、小学校すら満足に卒業できないでいる子供も多数いるのが現状です。

そこには、毎日裸足で水汲みをしている子供達がありました。

読み書きの出来ない子供達がありました。

家計を助ける為に働く子供達がありました。

今回集めて頂いた支援物資は、そのような境遇の山岳民族の方々へ送られました。



Donation Ceremony REPORT 2008

■ タイ北部への支援活動について ■ ～ランパーン物資贈呈式に至るまで～①

出来るだけ多くの方に…

タイ北部地域の人々への支援物資収集活動はこれで2回目となります。今回は、2007年11月～2008年2月頃まで収集活動を致しました。

前回の経験を活かして、今回は主に子供服・大人服・文房具・おもちゃに絞り、まず労働組合より社員の皆さんに呼び掛けを致しました。そして新聞や雑誌・ショールームなどでお客様へも呼びかけを致しました。

おかげさまで本当にたくさんの方々からあたたかい気持ちと一緒に多くの物資を頂きました。

たとえば思い出がたくさん詰っていて捨てられないが、タイの子供達が使ってくれるなら、とお店へわざわざ持って来て下さった方。自分の子供のように元気に育てて欲しい、とメッセージを下された方。知り合いへ声掛けして下さり、何度も何度もショールームへお持ち頂いた方。また遠く福岡よりインターネットで知った、と大きなダンボールを送って来て下さった方……。

驚きと同時に皆さまからのあたたかい気持ちに私達スタッフも本当にたくさんの感動を頂きました。



さあ！準備開始です！

そして1月にはすでに当初物資を置くために確保していた駐車場がいっぱいになって来ました。

今回は3月上旬には物資を輸送船へ載せる、と当初決めて進めておりましたので、まず1月半ばに1度、頂いた物資を大まかにダンボールへ詰めなおして、大体の量を把握することから始めました。

その作業によってコンテナの積載量に対してどのくらい集まっているか予測が出来ます。このとき車3台程の駐車場スペースがダンボールで高さ2mくらいになっていました。

そしてここからは更なる仕分け作業に向けて準備を始めます。事前に日本通運さんにご協力頂き、何度も現場へ足を運んで頂き、打ち合わせを繰り返しました。分類内容を明確にし、ダンボールの入れ方からガムテープの張り方、コンテナへの積込方法に至るまで詳細を決めました。

国外へ物資を送るのには税関を通さなくてはなりません。このような支援物資は商業的要素はありませんが、1点ずつ値段を設定し1箱の中に何が何点で何円分入っているかをリストに明記します。

これらを曖昧にしていると、せっかくの物資が途中で送れなくなる、ということも起こり得るので注意しておかねばなりません。



Donation Ceremony REPORT 2008

■ タイ北部への支援活動について ■ ～ランパーン物資贈呈式に至るまで②～

冷たい雨の降る中でも、心はあたたかく…

そして、集まった物資を一度全部開封、子供服やおもちゃなど種類別に分ける作業の後、ひとつひとつ丁寧にダンボール箱に詰めていく作業を、2月26日の火曜日、愛媛トヨタ社員有志、松山つばきライオンズの方々、木の実幼稚園の方々、総勢70名で雨の降る中で行われました。

高々と積み上げられた支援物資を前に、皆わいわいしながらもしっかり手は動いている……いった感じでした。10時から始めた作業ですが、昼食も休憩をほとんどすることなく、皆ただもうひたすら分け続けました。作業開始から8時間後、ようやく頂いた物資の仕分けが完了しました。

<頂いた物資の内訳は…>

子供服/大人服/おもちゃ/文房具/毛布など
ダンボール 約1,300箱
布団毛布などの包み 約60袋

これは個数にして4万6093個、およそ40フィートコンテナ（横11.6m×縦2.3m×高さ2.3m）約2基分に相当します。

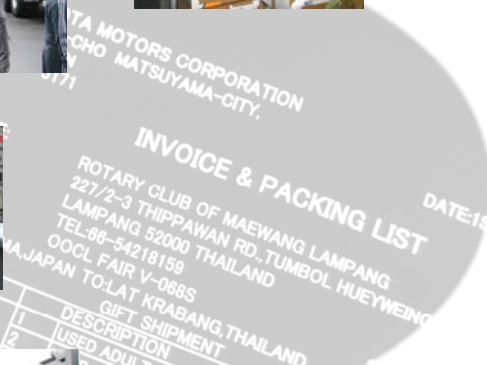


支援物資、海を越えついにタイへ

私たちは、この支援物資に込められた皆さまからの想いをひしひしと感じながら、人の優しさに感動し、あたたかさに触れ涙することとなりました。

これらを3月4日に、再び従業員有志によりコンテナ2基へ物資を積み込み、トレーラーが愛媛トヨタ本社を出発しました。

そして3月10日、松山港よりコンテナに船積みされた支援物資は11日に一旦九州の港へ寄港し、さらに大きな輸送船へ積み替えられて3月24日にバンコクへ到着、25日にはタイのランパーンへ到着したと、現地より連絡がありました。



Donation Ceremony REPORT 2008

■ タイ北部への支援活動について ■ ～ランパーン物資贈呈式に至るまで～③

支援活動のきっかけ

この支援活動のきっかけを作って下さったのは、タイ・ランパーン市の名士・スポン氏です。なぜかと申しますと、彼と弊社の専務の竹本と友好関係があったことから、タイ現地への物資支援活動が実現しました。

スポン氏は事業を興されており、日々世界中を飛び回られています。そして今回の打ち合わせのために、大変ご多忙な中、松山までお越し頂き、関係者との打ち合わせを行い、また現地での全ての手配・贈呈式等、本当に細やかなお気遣いでお世話をして下さいました。

おかげでこのような機会を頂けたことに、本当に感謝しています。



贈呈式参加に向けて

によると、今回は1回目よりもさらに山岳地帯の奥地へ物資を送り、その村で贈呈式をして下さること。そこで早速、贈呈式参加者を募ることに…。

そして専務・竹本をはじめ社内公募で集まった従業員9名・松山つばきライオンズさんから4名・写真家の宮内さま・JTBの石橋さま・そして県内外でご活躍中の歌手の松本さま、総勢17名が現地へ赴くこととなりました。



いよいよ現地へ出発です

そして4月10日、早朝松山空港から一同タイのランパーンへ向けて出発しました。

今回は、現地の子供達と交流する時間が頂ける、ということで、皆めいめに折り紙・ポラロイドカメラ・遊具やお菓子など、旅行バックがいっぱいになるほどギュウギュウに詰め込んでいきました。

夕方にバンコクに到着し、スポン氏のご手配頂いたバスに乗り込み、一同ランパーンへの道を進みました。折しもこの時期は、タイのお正月で水掛け祭り（ソクラン）と呼ばれる伝統的な行事の真っ只中。どんな小さな集落・村でも人々が水を掛け合います。

バンコクから北へとランパーンへ向けてひた走りしました。少しづつ夕日が落ちだんだん赤い空が濃紺へと変わる頃、私たちはスポン氏の別荘へと辿り着きました。

歓迎会にて日本の浴衣を披露

バスを降りると、スポン氏と奥様とご子息、その他たくさんの方が私達の到着を首を長くして待っていて下さいました。

その後、各自用意して頂いた部屋にてしばし休憩をとり、歓迎会に招待され皆で参加させて頂くことに。

日本人としてタイの方々と交流出来るせっかくの機会なので、女性は浴衣・男性は作務衣を持参し着替えて参加をしました。これはやはり珍しいようで、見物したり、一緒に記念撮影をしたり…。

そして夜のとばりが降りる頃、歌手/松本さんの素敵な歌声が会場を包み込みました。私たちはみな手拍子をしたり、うっとり聴き入りながら、明日の贈呈式への気持ちを新たに、めいめいが想いにふけた夜でした。

■ タイ北部への支援活動について ■
 ~支援物資贈呈式(Donation Ceremony)~①

いざランパーンの手奥へ！

さあ！いよいよ次の日はタイの山岳地帯・ランパーンの手奥へ出発です。ランパーンの手回りのクラブの方々、そして今回は日本語学校のワチラー先生・オウム先生、3人の学生さんが通訳として同行してくれました。彼女達はとても素直で向上心があり、いつも笑顔に満ち溢れていました。

タイでは、主に商用では英語・タイ語が主に使われているようでしたが、現地に行くほどまったく英語は通じなくなりました。おかげで、現地の言葉がほとんど聞き取れない私達にとって彼女達の存在は非常に心強いものでした。

車で走ること1時間半、ひたすら北へまっすぐな道です。タイの交通事情で日本と大きく違うところは、日本の様な右折がありません。ですから引き返す時は、左折を繰り返しますので、郊外になると交通渋滞が殆んど無く、車は80~100km位でビュンビュン走ります。



気分はさながらアドベンチャー映画の登場人物

そして、横道に入った瞬間、舗装のされていない道になりました。第1回の時も経験しましたが、山中に入った途端、風景ががらりと変わり本当にここを車で走れるのか？、といった不安さえ頭を過ります。

また今回は前回よりさらに山奥の村ということで、前回以上にすごい道の連続でした。最初車5台に分乗して出発しましたが、途中で乗用車では走行出来なくなり、小さなバスに乗り換えてさらに奥へ奥へと進みました。

坂道も見たことのないような傾斜で、前の車が加速をつけて上りきってから次の車が出発する、という具合です。後続車が続けて進むと、前の車が上りきれずに後ろへ下がってくる恐れが充分にあるからです。

しかし乗っているだけの私達は、気分はさながらアドベンチャーゲームの登場人物になったようでした。

Donation Ceremony REPORT 2008

■ タイ北部への支援活動について ■ ～支援物資贈呈式(Donation Ceremony)～②

村の人々のあたたかい心に触れて

さらに進むこと数Km、やがて一面焼き畑の村・トゥンワー村が見えてきました。ここはムス族が300人ほど暮らす小さな集落です。少し小高い丘の上に集会所のようなところがあり、私達は村の人々にあたたかい笑顔と踊りで迎えられ、その集会所に案内されました。会場はコンクリートの床の広い休憩所といった感じで、前には私達の歓迎を表した黄色の垂れ幕が掲げてありました。私達は入口で手をお水で清めて頂き、100人以上の子供達が体操座りをしてこちらをじっと見ている中、前へ準備された椅子へ座りました。そして村の人々が、紐で編んだお守りを私達の腕に丁寧に巻いて下さり、女性達が紡いだ美しいバッグを私達の首に掛けてくれました。

私達は大変感激しながら、両手を前に合わせてお礼の気持ちを伝えました。



届けられた支援物資を前に……

ふと周りを見回すと、私達が日本でたくさんの方々より頂き、一生懸命準備をした支援物資の箱が、いっぱい山積みされていました。

ひとつの家庭に一箱ずつ配られるそうです。予想はしていましたが、いざ実際に届いているのを目にすると、その物資がここへ届けられるまでの道のりが浮かんできました。物資を頂いた大勢の方々・準備をされた大勢の方々のことを思うと、良かったと思うと同時に、非常に感慨深くそして感謝の気持ちでいっぱいになりました。

現地の子供達とのふれあい

村長さんから感謝のお言葉を頂き、民族衣装に身を包みお化粧を施した子供達が登場し、楽器のリズムに合わせて踊りを披露してくれました。そのあと今度は私達からも日本の歌を童謡を4曲、リコーダーで伴奏し、村の方々へ感謝の心を込めて歌いました。

村の方々の反応は、おそらく生まれて初めて聴く日本の歌に、手拍子を取りながらあたたかい眼差しで聴いて下さいました。それがとてもうれしく、言葉の壁を越えた心の交流を感じた瞬間でした。

そして次に、新聞紙や折り紙で作ったカブトや紙風船・鶴などを配り、子供たちと一生懸命に紙飛行機を折り、一斉に外へ向けて飛ばしました。子供達の好奇心に満ちた真っ直ぐな目は、私達の緊張した心を自然に解きほぐしてくれました。

■ タイ北部への支援活動について ■ ～支援物資贈呈式(Donation Ceremony)～③

そして2つ目の村(ワイマイ村)へ

トゥンワー村での贈呈式が終わり、小高い丘で焼畑に囲まれた中で、私達は昼食を頂き、次の贈呈式の村へと向いました。車で約30分ほどさらに北へ走ると、ヤオ族が100人ほど暮す村・ワンマイ村が見えて来ました。

そしてこちらでも、民族衣装を身に着けた子供達に迎えられ民族舞踊を披露してくれました。私達も再び歌を披露しました。

ここでもあたたかい眼差しを合掌を送ってくれた子供達の姿に、国も文化も違えど、人間としての感謝を感じる心は万国共通であり、たとえ言葉が通じなくてもその気持ちを伝えることが出来るのだ、と感じずにはられませんでした。



出会い、そして別れ・・・

日本を出発してから4日間、驚きと感動に満ちた旅は本当にあっという間でした。この支援活動を通じて、本当にたくさんの方々との出会いの機会を頂きました。スポンさま、そのご家族をはじめ、ロータリークラブの方々・日本語学校の先生・学生さん、訪れた村の方々……数え上げるときりがありません。

”一期一会”という言葉がふと頭に浮かびました。『今こうして出会っている時間はもう2度とめぐっては来ない。たった一度きりのもの。だからこの一瞬を大切に思い、今出来る最高のおもてなしをしたい。』という千利休の茶の心得から始まった言葉ですが、今回その大切さを改めて感じた旅でした。

感謝の心とは……

今回の11月からの呼びかけに対し、本当に予想をはるかに上回る反響を頂きました。本当にありがとうございます。この場をおかりして厚くお礼申し上げます。皆様からの支援物資と一緒に頂いたあたたかいメッセージに私たちスタッフが涙することもしばしばありました。

日本は本当にモノに恵まれすぎて、ともすれば感謝の心、ふれあい、思いやり、真心、そういった人格を形成する上で、とても大切なことをおざなりにして生きているのではないかと、という印象さえ受けることがあります。

私たちはタイの山奥で子供たちの物質的に貧しくても懸命に生きる姿・純粋な瞳に心豊かに生きている人々との交流で多くの感謝の心を学びました。

そんな私たちに出来ること。

それは日本へ帰り、自分の周りの人たち、家族・友人、そしてお客様・上司や同僚など自分を取り巻くすべての人に感謝の気持ちを持って接することだと感じます。

私たちはこの活動を通じて、社員ひとりひとりがさらなる人間的成長につながることを目指し、長期的な活動に向けて継続していくため、今後も活動の改善に努めます。



少しでも貧困解消に役立てて

タイに物資支援

愛媛トヨタ 社会貢献の一環

【松山】愛媛トヨタ（横田英毅社長）は社会貢献活動の一環として、タイ北部地域へ物資の支援活動を実施する。支援物資は洋服、子供服、おもちゃ、文房具、毛布などで、全社員に加えて顧客にも呼びかけて物資を収集する。2月中旬まで収集に取り組み、3月上旬に松山港から支援物資を輸送する。4月には同社首脳らが現地を訪れ、支援物資贈呈式に参加する。中国四国地域の新車ディーラーで、こうした発展途上国への援助は珍しい。

07年2月から支援物資の収集活動を開始し、6月に現地で「支援物資贈呈式」を開催した。現地では感謝や賞賛の声が相

次いだことから、今後も活動を継続する。物資の収集は同社の労働組合が中心となる。顧客に使用しなくなった毛布、子供服、おもちゃなどの提供を呼びかけている。同社では「使い古した物資が必要か、本当に喜んでくれるか不安だったが、子供たちの純粋な瞳と心からの笑顔を見ることができた。子供たちの夢をつなきたいという思いで、今後も支援を続けたい」としている。



タイで行われた支援物資贈呈式

物資を輸送するのはタイ北部の山岳地域。北部のランパーン市から50キロの山奥の村落。十数部の少数民族が生活しているが、水道や電気もなく、主食の米でさえ自給できない村落も存在し、人々が貧困にあえいでいる。現地に住む男性から親交のあった愛媛トヨタ幹部に要請があり、同社として昨年より支援を行っている。

■ その他 広報活動について ■

愛媛新聞 2008年4月25日掲載

タイに支援物資贈る

愛媛トヨタなど衣服・毛布5万点

愛媛トヨタ自動車(松山市、横田英毅社長)はこのほど、タイ北部の二つの村に衣服や毛布など約五万点の日用品を寄贈。二十三日、現地を訪れたメンバーら十二人が同市大手町一丁目の愛媛新聞社を訪れ、支援活動を報告した。

タイへの支援は、同社役員と交流のある現地男性を通して昨年から実施。今回は、ランパーン



タイ北部のトゥンガー村での支援物資贈呈式 (提供写真)

資は、昨年十一月から今年二月中旬まで、社員や同社労働組合から募ったほか、県内の営業所などで来店客にも呼び掛けられた。松山つばきライオンズクラブの協力もあり、おもちゃ、文房具も含め、

点

行書、草書のリズム感あ

段ボール千三百箱分を集めた。三月下旬に船で輸送。四月十二日に現地で贈呈式を行い、同社社員やライオンズクラブの十七人が村の人々に手渡した。村のほぼ全員に当たる約三百人が集まり、踊りを披露するなどして歓迎。子供服や毛布が特に喜ばれたという。参加した同

社の井藤健二さん(左)は「タイの人と交流でき、温かい心と感動をもらった。今後も支援活動を続けていきたい」と話していた。

またいっぱい遊ぼつね。

■ その他 広報活動について ■

日刊自動車新聞 2008年5月27日掲載

愛媛トヨタ、社会貢献活動

タイ北部の支援継続

現地で物資贈呈式開く

【松山】愛媛トヨタ（横田英毅社長）はタイ北部への支援活動を継続実施する。昨年
から同社ではタイ北部の貧しい地域へ洋服、子ども服、おもちゃ、文房具などを贈呈し
ている。今年も4月に同社首脳らが現地を訪れ、贈呈式を実施した。写真。社員、顧客
などからの支援物資をタンホール1300箱、毛布など60袋、品数にして4万6093
個の物資を収集し、タイのランパーン港から現地に輸送した。社会貢献活動の一環や、
現地の人から感謝され、教えられることも多いため、活動を継続していく。



タイ北部の山岳地帯は、75万人の少数民族が暮らしてお

り、独自の言語と高度な手芸技術による民族衣装を持つ。伝統的な文化を継承しているものの、最近では自給できない状態が続いているという。現地に住む人物からの依頼があり、昨年同社が支援している。

今年タイ北部のムス族300人が暮らすトゥンガール村、ヤオ族が100人ほどのワンマイ村で贈呈式を行った。一行はタイの首都バンコクからチェンマイに飛び、ラ

ンパーンへバスで移動。車6台で分乗し、途中地図にない山道を走行して到着した。

現地では子どもらが歌や踊りを披露した。一方で、スタッフらが日本の童謡を歌い、紙飛行機を折り、紙風船や新聞紙で作成したカブトをプレゼント。写真を一緒に撮影し、お互いに交流した。

同社では「物質的に貧しくても懸命に生きている子どもらの澄んだ瞳、心豊かに生活する人々を見ることができ

た。物資支援を通じて多くの
ありがとももらった。この
活動を通じて感謝の気持ち
どのように伝えられるかを考
えたい」と話している。今後
も活動を継続する
ことで、社会貢献
に結び付ける考
えだ。